

日本における中国画題綜覧（一）

A Compendium of Chinese Painting Themes in Japan (2)

張 小 鋼

Zhang Xiaogang

三八

う 行

う 禹

禹はすなわち夏禹のことである。姓は姒、名は文命という。禹の父親は鯀である。鯀の父親は顓頊である。顓頊の父親は昌意である。昌意の父親は黄帝である。すなわち、禹は黄帝の玄孫であり、顓頊帝の孫である。禹の父親である鯀は堯帝の命を受け、治水したが、九年経っても効果がなかった。仕方なく堯帝は舜を起用した。舜は堯帝の代行として治水工事を巡視した。そこで鯀の治水の無作為が原因であることを突き止め、鯀に責任を取らせ、羽山で処刑した。舜はさらに禹を治水の責任者として任命し、父親の仕事を続けさせたのである。禹は大変勤勉で、皆の絶大な信頼を一身に集め、一生懸命に働いた。十三年間外で一心に治水し、家の前を通っても入らなかつたのは有名な話である。禹は普段衣食が素朴で、住まいの家も簡素で、民衆と苦楽を共にし、節約した金をすべて治水の工事につぎ込んだ。また禹は治水する際、鬼神を敬い、実際の状況に基づき、うまく地形を利用し、正確に治水の計画を策定した。決して自然に反する工事をしない。禹は遂に河川を整備し、洪水を征服した。それだけではなく、禹は治水す

ると同時に、農地を改良し、農業の指導をも行った。その結果として作物の豊作をもたらし、民衆の生活を豊かにした。さらに、税収をあげ、国家の財政を強化した。そのため、舜は禹に玄圭を賜り、彼の功績を表彰し、治水の成功を宣言した。帝舜が崩御した後、禹は即位して天子となった。国の号を夏とする。即位して十年、東へ巡視した際、会稽で崩御した。

【出典】

夏禹，名曰文命。禹之父曰鯀。鯀之父曰帝顓頊。顓頊之父曰昌意。昌意之父曰黄帝。禹者，黄帝之玄孫，而帝顓頊之孫也。禹之曾大父昌意，及父鯀，皆不得在帝位，為人臣。當帝堯之時，鴻水滔天，浩浩懷山襄陵，下民其憂。堯求能治水者。羣臣四嶽皆曰，鯀可。堯曰，鯀為人負命毀族，不可。四嶽曰，等之未有賢於鯀者，願帝試之。於是堯聽四嶽，用鯀治水。九年而水不息，功用不成。於是帝堯乃求人，更得舜。舜登用，攝行天子之政。巡狩行視鯀之治水無狀。乃殛鯀於羽山以死。天下皆以舜之誅爲是。於是舜舉鯀子禹，而使續鯀之業。堯崩。帝舜問四嶽曰，有能成美堯之事者，使居官。皆曰，伯禹爲司空。可成美堯之功。舜曰，嗟，然。命禹。女平水土，維是勉之。禹拜稽首，讓於契、后稷、皋陶。舜曰，女其往視爾事矣。禹爲人敏給克勤，其惠不違，其仁可親，其言可信。聲爲律，身爲度，稱以出。廩薑穆穆，爲綱爲紀。禹乃遂與益、后稷奉帝命，命諸侯百姓，興人

徒以傳土，行山表木，定高山大川。禹傷先人父鯀功之不成受誅，乃勞身焦思，居外十三年。過家門不敢入。薄衣食，致孝于鬼神，卑宮室，致費於溝洫。陸行乘車，水行乘船，泥行乘橈，山行乘樺。左準繩，右規矩，載四時。以開九州，通九道，陂九澤，度九山。令益予衆庶稻可種卑溼，命后稷予衆庶難得之食。食少，調有餘相給，以均諸侯。「中略」於是九州攸同，四奧既居，九山萊旅，九川滌原，九

澤既陂，四海會同，六府甚脩，衆土交正，致慎財賦，咸則三壤，成賦中國。賜土姓。祇臺德先，不距朕行。令天子之國，以外五百里甸服，百里賦納總，二百里納銓，三百里納秸，服，四百里粟，五百里米，甸服外五百里侯服，百里采，二百里任國，三百里諸侯，侯服外五百里綏服，三百里揆文教，二百里奮武衛，綏服外五百里要服，三百里夷，二百里蔡，要服外五百里荒服，三百里蠻，二百里流，東漸于海，西被于流沙，朔南暨，聲教訖于四海。於是帝錫禹玄圭，以告成功于天下。天下於是太平治。（漢・司馬遷撰『史記』卷二，夏本紀第二）

【作例】

「禹王治水」(宋・蔡沉撰『大魁書經集注』、明萬曆年間 [1573] 1630) 刊本

「治水之載」(『圖像合璧君臣故事句解』卷上、延寶二年 [1674] 上田甚兵衛板行、和刻本)

「禹王治洪水圖」(橘有税「橘氏宗兵衛」『繪本寫寶袋』卷四、享保五年 [1720] 稱航堂板、明和七年 [1770] 須原屋・柏原屋再板)

「夏の禹王洪水を治む」(前北齋畫改狂老人筆『畫本魁』卷一、天保七年 [1836] 秋田屋等刊本)

→「禹王」

ういんく 烏衣國

烏衣国については不詳である。「三才図絵」によると、その国の人 は黒い服を着、大きい巾が膝や腕まで纏う。彼らは中国人を見ると、背中しか見せない。もし、顔が見られたら相手を殺す。売り物を草の上に置き、人と交易する。直接に手渡さない。相手も同じようにする。もし、売値が安すぎると、相手を追いかけて殺すという。

【出典】

烏衣國，其人衣黑衣，太巾披至膝腕。見漢人則背行，不令見，見之即殺，謂既見吾面，不令其生。以草爲蓬，懸物于上。與人交易，不相授受。彼亦以物懸而易之。如價不及，則追面殺之。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十二卷）

【作例】

「烏衣國」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十二卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)

「烏衣國」(寺島良安撰『和漢三才圖會』卷十四、正徳二年 [1712] 序、杏林堂藏板)

「烏衣國」(橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷五、享保四年 [1719] 寶文堂刊本)

うおう 禹王

→「禹」

【作例】

「夏禹王」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物一卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)

「禹王」(馬場信意『分類畫本良材』卷一、正徳五年 [1715] 須原茂兵衛・柏屋四郎兵衛藏板)

「禹王」(林守篤編述『畫筌』卷四、正徳二年 [1712] 序、享保六年 [1721] 保壽堂・養心堂刻本)

うおづりのず 魚釣圖

【作例】

「魚釣圖」(信天翁月岡法橋雪鼎纂『和漢名筆金玉畫府』卷六・補遺、
明和八年 [1771] 寶文堂刻本)

うきつ 于吉

于吉は琅琊(山東省)の人である。一生懸命に修業したが、突然癩癩という病気にかかった。そこで彼は朝から晩まで祈り、老君を感動させた。仙翁を遣つて于吉の病気を治させた。後に呉の孫策は于吉を招き、兵士たちの病気を治させた。しかし、孫策は于吉のことを嫉妬し、彼を殺した。すると、あつという間に于吉の屍が消えた。後に于吉はまた世間に戻り、百年余り生活した後、仙人になり去つて行つた。

【出典】

于吉、琅琊人。精修苦道，忽得癩疾，晨夕告天，誠感老君，令仙翁授吉經曰，非但愈疾，當得長生，化行天下。吉得之，疾遂除。凡消灾治病，無不立驗。後老君數降，親授其旨。孫策平江東，將士多病。請吉，嚙水即差。策惡之，天久旱，乃縛吉暴日中，即大雨。策忌而殺之，俄失其尸。周旋人間，復百餘年仙去。(明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷三)

【作例】

「于吉」(寂照主人月僊寫並題『列仙圖贊』三、天明四年 [1784] 寂照寺藏板)

うきゅうのぼう 烏臼棒

「烏臼棒」は烏臼和尚が一人の僧侶との禪についてのやり取りであり、禪宗の公案の一つである。

【出典】

僧從定州和尚會裏，來到烏臼。烏臼問，定州法道何似這裏。僧云，不別。白云，若不別，更轉彼中去。便打。僧云，棒頭有眼。不得草草打人。白云，今日打著一箇也。又打三下。僧便出去。白云，屈棒元來有人喫在。僧轉身云，爭奈杓柄在和尚手裏。白云，汝若要，山僧回與汝。僧近前奪白手中棒，打白三下。白云，屈棒屈棒。僧云，有人喫在。白云，草草打著箇漢。僧便禮拜。白云，和尚卻恁麼去也。僧大笑而出。白云，消得恁麼。消得恁麼。(宋・雪竇重顯頌古、圓悟克勤評唱『佛果圓悟禪師碧巖錄』卷八，第七十五則)

【作例】

「烏臼棒」(橋宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷六、貞享四年 [1687] 平塾屋・貫氣堂等梓行、文政一年 [1818] 再刊本)

「烏臼棒」(某岡之繪『繪圖の林』卷下、元禄二年 [1689] 長罡堂梓板)

うんこうもん 于公高門

漢の于定国(心)前(心)は字が曼倩といい、東海郡(山東省郟城北西)というところの生まれである。定国の父親は県の法曹である。彼が判決したことは皆が公平と思ひ納得する。従つて地元の人々は本人がまだ生きているうちに「于公祠」という祠堂を建てて祀るようになった。その閭門が壊れたため、地元の人たちが力を合わせて修理した。于公は「門をやや高くしてください。駟馬の馬車が入れるように。私は一生冤罪の判決をしたことがないので、子孫はきつと出世するだろう。」と頼んだ。父親の予言通りに、宣帝の頃、定国が出世して宰相となった。定国は子供の頃から父親に従ひ法律のことを教わった。父親が亡くなった後、定国も法曹になった。彼が才能を發揮し、間もなく頭角が現れ、侍御史として推薦され、さらに御史中丞に昇進した。昭帝が

崩御した後、昌邑王が即位した。しかし王は品行が悪く、淫乱である。定国は諫めた。後に王が廃止され、大將軍霍光が摂政を執り行い、定国が光禄大夫、平尚書事に昇進した。定国は性格が謙虚で、礼儀が正しい。なお儒学を重視し、また廷尉の超を師として迎え、春秋の学を教わった。定国は案件を扱う時に、特に鰥寡孤独に配慮することと、疑点が残る案件を軽く判決することを原則とし、慎重にさらに慎重に行動した。そのため、朝廷に「定国は廷尉になれば、民は冤罪がなし」という評判がある。甘露三年（前52）に、丞相となり、西平侯に封ぜられた。元帝の頃、丞相を辞任して、家に帰った。亡くなった後、安侯という諡を贈られた。（斎藤隆三『晝題辞典』、金井紫雲『東洋晝題綜覧』の「うこうかうもん」参照）

【出典】

于定国、字曼倩，東海邾人也。其父于公爲縣獄史。郡決曹，決獄平，羅文法者，于公所決皆不恨。郡中爲之生立祠。號曰于公祠。〔中略〕定国少學法于父。父死，後定国亦爲獄史。郡決曹，補廷尉史，以選與御史中丞從事治反者獄。以材高舉侍御史，遷御史中丞。會昭帝崩，昌邑王徵即位。行淫亂，定国上書諫。後王廢，宣帝立。大將軍光領尚書事，條奏羣臣諫昌邑王者。皆超遷。定国繇是爲光禄大夫，平尚書事。甚見任用。數年遷水衡都尉。超爲廷尉。定国乃迎師學春秋，身執經北面備弟子禮。爲人謙恭，尤重經術。士雖卑賤，徒步往過。定国皆與鈞禮，恩敬甚備。學士咸稱焉。其決疑平法，務在哀鰥寡，罪疑從輕，加審慎之心。朝廷稱之曰，張釋之爲廷尉，天下無冤民。于定国爲廷尉，民自以不冤。〔中略〕七十餘薨。諡曰安侯。（漢・班固撰『漢書』卷七十一，雋疏于薛平彭傳）

前漢 于定国，字曼倩，東海邾人。其父于公爲縣獄史。郡決曹，決獄平，羅文法者，于公所決皆不恨，郡中爲之生立祠。始其閭門壞，父老方共治之。于公謂曰，少高大閭門，令容駟馬高蓋車。我治獄多

陰德，未嘗有所冤，子孫必有興者。至定国，宣帝時爲丞相，封西平侯。子永爲御史大夫，封侯傳世云。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「于公高門」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編卷五、享和元年〔180〕序刊本、河内屋等發行）

うさぎなみのうえをはしる 兔走波上

『絵本故事談』は『博物誌』より引用した内容としたが、「兔波上を走る」という記述は見られない。

【作例】

「兔走波上」（橘有税『繪本故事談』卷一、正徳四年〔1714〕稱航堂刊本）

うさく 禹鑿

「禹鑿」は「禹門」の俗稱で、すなわち河南省洛陽の龍門のことである。

【出典】

禹門，禹貢龍門也。亦曰禹門渡。云兩山石立，河出其中，廣百步，世謂禹鑿。所謂三月魚上渡而爲龍也。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理八卷）

【作例】

「禹門」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理八卷、萬曆三十七年〔1609〕刊本）

「禹鑿」（普齋岡子雉著述「大岡普齋」、橋辨次守国「橋辨次」圖畫『畫典通考』卷四、享保二二年〔1727〕寶文堂刊本）

うすい 烏騷

烏騾は黒と白が交えている毛色の馬であり、一日千里を走れるという。かつて項羽の愛馬は烏騾であった。

【出典】

項王則夜起，飲帳中。有美人名虞，常幸從。駿馬名騾，常騎之。「中略」乃謂亭長曰，吾騎此馬五歲，所當無敵，嘗一日行千里。不忍殺之，以賜公。（漢・司馬遷撰『史記』卷七，項羽本紀第七）

魯頌駉篇釋畜以騾爲蒼白雜毛。說文易白作黑，不知何據。史記項羽駿馬名騾，所當無敵，一日千里，世號烏騾。此別是一種，豈可以烏泥耶。（清・姚炳撰『詩識名解』卷四）

【作例】

「烏騾」〔普齋岡子雉著述「大岡普齋」、橋辨次守国「橋辨次」圖畫「畫典通考」卷四、享保一二年〔1727〕寶文堂刊本〕

↓「騾」

うすんこくおうおうれい 烏孫国王王靈

【作例】

「烏孫国王王靈」〔畫本西遊全傳〕二編卷七

うそんこく 烏孫國

烏孫國に関する最初の記載は漢の司馬遷撰『史記』卷百二十三大宛列伝に見える。それによると、張騫が西域を開通した際、初めて烏孫國の存在が知られるようになった。張騫が三回目西域に行った際、使者として直接にその国に行ったという。烏孫國の西に三爪蠻があり、頭領がおり、地主が田植えをする。彼の地の長い毛が生え、出かけて百姓を略奪するという。

【出典】

烏孫在大宛東北可二千里，行國，隨畜，與匈奴同俗。控弦者數萬，

敢戰。故服匈奴，及盛，取其羈屬，不肯往朝會焉。「中略」是後天子數問騫大夏之屬。騫既失侯，因言曰，臣居匈奴中，聞烏孫王號

昆莫，昆莫之父，匈奴西邊小國也。匈奴攻殺其父，而昆莫生棄於野。烏嚙肉盡其上，狼往乳之。單于怪以爲神，而收長之。及壯，使將兵，

數有功，單于復以其父之民予昆莫，令長守於西。昆莫收養其民，攻傍小邑，控弦數萬，習攻戰。單于死，昆莫乃率其衆遠徙，中立，不肯朝會匈奴。匈奴遣奇兵擊，不勝，以爲神而遠之，因羈屬之，不大

攻。「中略」騫既至烏孫，烏孫王昆莫見漢使如單于禮，騫大慙，知蠻夷貪，乃曰，天子致賜，王不拜則還賜。昆莫起拜賜，其他如故。（漢

・司馬遷撰『史記』卷一百二十三，大宛列傳第六十三）

烏孫國，其國西有三爪蠻，有頭目，地主種田，身生長毛，出處掠百姓。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三卷）

【作例】

「烏孫國」〔明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三卷、萬曆三十七年〔1609〕刊本〕

「烏孫國」〔寺島良安撰『和漢三才圖會』卷十四、正徳三年〔1713〕序、杏林堂藏板〕

「烏孫國」〔橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷四、享保四年〔1719〕寶文堂刊本〕

うちょうこく 烏菴國

『北史』によると、烏菴國は賒彌國の南にある。北には葱嶺があり、南には天竺がある。その土地には果樹が多く、稲や麦が豊作できる。民が死罪になっても処刑されず、山の深い所に流されるだけである。もし事件に冤罪の可能性がある場合、当事者に薬を飲ませて自分の潔白を証明させる。それから状況を見て判決するという。

【出典】

烏菴國，在賒彌南，北有蔥嶺，南至天竺。婆羅門胡爲其上族。婆羅門多解天文凶吉之數，其王動則訪決焉。土多林果，引水灌田，豐稻麥。事佛，多諸寺塔，極華麗。人有爭訴，服之以藥，曲者發狂，直者無恙。爲法不殺，犯死罪唯徙於靈山。西南有檀特山，山上立寺，以驢數頭運食山下，無人控御，自知往來也。（唐・李延壽撰『北史』卷九十七，列傳第八十五）

烏菴國，民有死罪不殺，唯徙之空山，任其飲啄。事涉疑似以藥服之清濁自驗，隨事輕重而決。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四卷）

【作例】

「烏菴國」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本）

「烏菴國」（寺島良安撰『和漢三才圖會』卷十四、正徳三年 [1713] 序、杏林堂藏板）

「烏菴國」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷四、享保四年 [1719] 寶文堂刊本）

うつしてふねをくしえんしよ 移舟泊煙渚

唐の孟浩然の「宿建徳江」という五言絶句を図解する絵である。

【出典】

移舟泊煙渚，日暮客愁新。野曠天低樹，江清月近人。（孟浩然「宿建徳江」，清・彭定求等編『全唐詩』卷一百六十）

【作例】

「移舟泊煙渚」（『百人一詩書譜』、安永三年 [1774] 有斐堂・玉樹堂原刻、寛政六年 [1794] 再刻本）

うてんこく 于闐國

于闐國は西域の古国で、今日の新疆ウイグル自治区和田県である。「漢書」によると、長安から九千六百七十里離れている。南には姑羌、南には姑墨との国境があるという。女子と男子の格好が同じである。死者が火葬された後、骨が拾われて埋葬される。仏典によると、仏は雁が死んだ後、それを砂で埋葬する。その墓が重ねていくと、「雁塔」と呼ばれる。おおよそ人が亡くなったら、その骨を同じ塔に納骨される。その年齢の順番で納骨される。後に仏も亡くなり、前例に従い砂で墓を作った。その弟子たちが墓の前に住みつく。故に「沙門」と呼ばれる。僧侶が沙門で自称するのはその時から始まった。中国の信者は皆胡人の風習を習い、さらに七重の塔を作り、金の色で飾り、幸せを祈るためであるという。

【出典】

于闐國，王治西城，去長安九千六百七十里。戶三千三百，口萬九千三百，勝兵二千四百人。輔國侯、左右將、左右騎君、東西城長、譯長各一人。東北至都護治所三千九百四十七里，南與婁羌接，北與姑墨接。于闐之西，水皆西流，注西海。其東，水東流，注鹽澤，河源出焉。多玉石。西通皮山三百八十里。（漢・班固撰『漢書』卷九十六上，西域傳第六十六上）

于闐國婦人衫袴束帶與男子同，死者以火化之，收骨而葬。佛書云，佛見鴈死於地，以沙葬之，後因之以作墳塚數層，胡稱曰鴈塔。凡人死者，其骨共葬一塔，序其長幼而葬，居喪者剪髮長四寸。後佛涅槃，循其故事，亦以沙爲塚，其徒守塚門而居，故稱沙門。僧稱沙門自此始。中國好佛者皆徼胡俗，加以奇巧作七層，飾以金彩，以求福利。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十二卷）

【作例】

「于闐國」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十二卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本）

〔于闐國〕（寺島良安撰『和漢三才圖會』卷十四、正徳三年〔1713〕序、杏林堂蔵板）

〔于闐國〕（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷五、享保四年〔1719〕寶文堂刊本）

うまいなないてはくじつくれ 馬嘶白日暮

唐の呂温りよおんの「鞏路感懷きやうろかんかい」という五言絶句を図解する絵である。

【出典】

馬嘶白日暮，劍鳴秋氣來。我心渺無際，河上空徘徊。（呂温「鞏路感懷」，明・李攀龍編『唐詩選』卷六・五言絶句）

【作例】

「馬嘶白日暮」（『百人一詩畫譜』、安永三年〔1774〕有斐堂・玉樹堂原刻、寛政六年〔1794〕再刻本）

「馬嘶白日暮」（石峯先生『書本唐詩選』、天明八年〔1788〕高山房原刻、文化二年〔1805〕再刻本）

うまをあらうづ 洗馬圖

【作例】

「洗馬圖」（法眼周山編『和漢名筆畫英』卷一、寛延二年〔1749〕序、寛延三年〔1750〕西村源六・洪川清右衛門刊本）

うみんこく 羽民国

羽民国は伝説の国である。『山海經』によると、羽民国の人は長い頭をしており、体に羽が生えているという。また長い頬をしており、鳥のような口ばし、赤い目、白い頭をしている。羽があるが、遠く飛べないと伝えられている。

【出典】

羽民国在其東南，其爲人長頭，身生羽。一曰，在比翼鳥東南，其爲人長頰。（晉・郭璞注『山海經』海外南經）

羽民国在海東南，崖巘間有人，長頰鳥喙，赤目白首，生毛羽，能飛不能遠，似人而卵生。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四卷）

【作例】

「羽民国」（馬昌儀撰『古本山海經圖說』海外南經、山東畫報出版社、2001年）

「羽民国」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四卷、萬曆三十七年〔1609〕刊本）

「羽民国」（寺島良安撰『和漢三才圖會』卷十四、正徳三年〔1713〕序、杏林堂蔵板）

「羽民国」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷五、享保四年〔1719〕寶文堂刊本）

うめ 梅

『三才図会』によると、梅には四徳がある。初めて出来た蕾は元、開花は亨、実った実は利、熟れたのは貞とする。ちなみに「元・亨・利・貞」は『易経』にある最初の言葉である。なお、梅には「四貴」がある。稀を貴とし、繁を貴としない。老を貴とし、嫩を貴としない。瘦を貴とし、肥を貴としない。含を貴とし、開を貴としないという。

【出典】

梅具四徳，初生葉爲元，開花爲亨，結子爲利，成熟爲貞。梅有四貴，貴稀不貴繁，貴老不貴嫩，貴瘦不貴肥，貴含不貴開。范石湖梅譜凡十一種，紫蒂紅梅、玉疊綠萼、粉紅消梅、杏梅、鶴頂梅、時梅、秋梅、枯梅，又有一種蠟梅，花作蜜色，亦有三種，罄口、荷花、九英。惟九英爲下品。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十一卷）

【作例】

- 「梅」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十一卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)
- 「梅」(寺島良安撰『和漢三才圖會』卷八十六、正徳二年 [1712] 序、杏林堂藏板)
- 「梅」(盆中梅)(玉翠齋藤原義包圖『畫圖撰要』卷下、明和三年 [1766] 層山堂刻本)
- 「無題」[梅](抱一上人編、尾形光琳繪『光琳百圖』上、文化一二年 [1815] 跋、博文館藏板)
- 「梅」[扇面](尾形光琳繪『光琳百圖』下、文化一二年 [1815] 跋、博文館藏板)
- 「梅」[梅に小鳥](『初心畫鑑』、明和三年 [1766] 和泉屋・西村屋再版)
- 「梅」(職巧雛型錦袋畫叢)、文政一一年 [1828] 文花堂刻本)
- 「梅」[扇面](揺月素眞先生畫『素眞畫譜』初編、安政五年 [1838] 序、探花堂・文會堂刻本)
- 「梅」(文鳳山人「文鳳駿聲」『文鳳畫譜』三編、文化八年 [1811] 河内屋・吉田屋刊本)
- 「梅」(『北溪漫畫初編』、永樂屋刊本)
- 「梅」[雲谷等禪筆](法眼春卜一翁纂『和漢名畫苑』三卷、寛延二二年 [1749] 序、寶文堂刻本)
- 「梅」(『繪本初心柱立』三、正徳五年 [1715] 新版、寶曆一一年 [1761] 再刻、小林亭石衛門・今井七郎兵衛刊本)
- 「無題」[梅](木風翁文紹寫『古今名家畫苑』初編、須原屋等刊本)
- 「梅」(『雅興筆意畫圖絶妙』上、安永三年 [1774] 序、明和九年 [安永一、1772] 跋、弘簡堂藏板)
- 「無題」[梅](法眼春卜雪静編『畫巧潜覽』卷一、元文五年 [1740] 敦賀屋刊本)

「梅」[二図](副孟義編『宋紫石畫譜』卷上、明和二年 [1765] 求古堂梓、須原屋刊本)
↓「梅花」

うめにいんこ 梅にいんこ

【作例】

「梅にいんこ」[呂記筆](信天翁月岡法橋雪鼎纂『和漢名筆金玉畫府』初卷、明和八年 [1771] 寶文堂刻本)

うめにうぐいす 梅に鶯

【作例】

「梅に鶯」(玉翠齋藤原義包圖『畫圖撰要』卷中、明和三年 [1766] 層山堂刻本)

「梅鶯」[雲谷雪林筆](法眼春卜一翁『和漢名畫苑』三卷、寛延二二年 [1749] 序、寶文堂刻本)

「梅鶯圖」(桂處南原薫摹『聚美畫鑒』卷、明治一二年 [1889] 刊本)

うめにおしろ 梅におしろ (白頭)

【作例】

「梅におしろ」[法橋探幽筆](法橋春卜畫『和漢名筆畫本手鑒』、享保五年 [1720] 序・跋、前川文榮堂梓、文榮堂藏板)

「梅におしろ」[長崎松亭筆](法橋春卜一翁『和漢名畫苑』六卷、寛延二二年 [1749] 序、寶文堂刻本)

「梅花白頭翁」(渡邊瑛編『邊氏畫譜』、文化三年 [1806] 刊本)

うめにつき 梅に月

【作例】

「梅に月」（尾形光琳『光琳百圖』下、文化一二年〔1815〕跋、博文館藏板）

うめにはと 梅に鳩

【作例】

「梅に鳩」（玉翠斎藤原義包圖『畫圖撰要』卷下、明和三年〔1766〕層山堂刻本）

「梅に鳩」（橘守国畫圖『運筆簞畫』卷中、寛延一年〔1768〕序、弘化一年〔1844〕熙春堂藏板、須原屋等發行）

うめにむくとり 梅に掠鳥

【作例】

「梅にむく鳥」（呂記筆）（法眼春卜一翁集『畫史會要』卷二、寶曆三年〔1753〕須原茂兵衛等刊本）

うめばな 梅花

↓「梅」

【作例】

「梅花」（鮮斎永濯繪『萬物雛形畫譜』三編、明治一二年〔1879〕寶集堂刊本）

うゆうせんせい 烏有先生

漢の司馬相如（前179～前117）の『子虚賦』には烏有先生という人物がいるが、実在の人物ではない。「烏有」とは存在しないという意味である。

【出典】

蜀人楊得意爲狗監，侍上。上讀子虚賦而善之，曰，朕獨不得與此人

同時哉。得意曰，臣邑人司馬相如自言爲此賦。上驚，乃召問相如。相如曰，有是。然此乃諸侯之事，未足觀也。請爲天子遊獵賦。賦成奏之。上許，令尚書給筆札。相如以子虚，虚言也。爲楚稱。烏有先生者，烏有此事也。爲齊難。無是公者，無是人也。明天子之義。故空藉此三人爲辭。以推天子諸侯之苑囿。其卒章歸之於節儉。因以風諫。奏之天子。天子大說。（漢・司馬遷撰『史記』卷一百一十七，司馬相如列傳第五十七）

うんがいによるこえをいらず 雲外夜射聲圖

【作例】

「雲外夜射聲圖」（橘有税「橘氏宗兵衛」『繪本寫寶袋』卷五、享保五年〔1720〕稱航堂板、明和七年〔1770〕須原屋・柏原屋再板）

うんかんきゆうぼう 雲間九峯

【作例】

「雲間九峯」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷二、享保四年〔1719〕寶文堂刊本）

うんすい 雲水

空にある水気は「雲水」という。

【出典】

水氣之在天爲雲水。（宋・陸佃撰《埤雅》卷二十）

うんちゆうし 雲仲子

【作例】

「雲仲子之像」（橘有税「橘氏宗兵衛」『繪本寫寶袋』卷四、享保五年〔1720〕稱航堂板、明和七年〔1770〕須原屋・柏原屋再板）

うんちゅうしょうまきようをあげてようきをみる

雲中子 掲照魔鏡視妖気

【作例】

「雲中子 掲照魔鏡視妖気」(法橋玉山畫『畫本玉藻譚』卷一、文化二年 [1805] 刊本)

うんちゅうふくろくじゅ 雲中福祿壽

↓「福祿壽」

【作例】

「雲中福祿壽」(鄰松先生纂、英一蝶筆『群蝶畫英』上、明和六年 [1769] 題言、安永七年 [1778] 山城屋發行)

うんぼうせんせい 雲房先生

↓「鍾離權」

【作例】

↓「呂洞賓」

うんぼうりよじゅんようをどす 雲房度呂純陽

↓「呂洞賓」

うんもんぜんじ 雲門禪師

雲門禪師は雲門文偃のことである。俗姓は張といい、浙江嘉興の人である。十七歳に出家し、黄檗希運の法嗣睦州道従に参じ、さらに雪峰義存に参じてその法を嗣ぐ。雲門山に住して三十年になる。

【出典】

韶州 雲門山 光奉院 文偃禪師、嘉興人也。姓張氏、幼依空王寺 志澄律師出家。敏質生知、慧辯天縱。及長、落髮稟具於毗陵壇、侍澄

數年、探窮律部。以己事未明、往參睦州。州纔見來、便閉卻門。師

乃扣門、州曰、誰。師曰、某甲。州曰、作甚麼。師曰、己事未明、

乞師指示。州開門一見便閉卻。師如是連三日扣門、至第三日、州開

門、師乃拶入、州便擒住曰、道、道。師擬議、州便推出曰、秦時鏡

(不是金字邊是車字邊) 轆轤。遂掩門、損師一足。師從此悟入。州

指見雪峰、師到雪峰莊、見一僧迺問、上座今日上山去那。僧曰、是。

師曰、寄一則因緣、問堂頭和尚、祇是不得道是別人語。僧曰、得。

師曰、上座到山中見和尚上堂、衆纔集便出、握腕立地曰、這老漢項

上鐵枷、何不脫卻。其僧一依師教。雪峰見這僧與麼道、便下座攔臂

把住曰、速道、速道。僧無對。峯拓開曰、不是汝語。僧曰、是某甲

語。峯曰、侍者將繩棒來。僧曰、不是某語、是莊上一浙中上座教某

甲來道。峯曰、大衆去莊上迎取五百人善知識來。師次日上雪峰、峯

纔見便曰、因甚麼得到與麼地。師乃低頭、從茲契合。「中略」以乾

和七年己酉四月十日、順寂。塔全身於方丈。(宋・普濟撰『五燈會元』

卷十五、雪峰存禪師法嗣)

うんもんほうい 雲門縫衣

【作例】

「雲門縫衣」(文鳳山人「文鳳駮聲」『文鳳畫譜』三編、文化八年 [1811] 河内屋・吉田屋刊本)

うんりこんごうそうまん 雲裡金剛宋萬

宋萬は『水滸伝』の中の一人の豪傑である。「雲裡金剛」は宋萬の綽名である。彼は梁山泊の長老であり、白衣秀士王倫、摸着天杜遷とともに梁山泊を創建した人物である。

【出典】

朱貴引著林冲、來到聚義廳上。中間交椅上、坐著一個好漢、正是白

衣秀士王倫。左邊交椅上，坐著摸著天杜遷。右邊交椅，坐著雲裡金剛宋萬。（百二十回本『水滸傳』第十一回）

【作例】

「宋萬」（清・陸謙畫『天罡地煞圖』不分卷、天保六年〔1835〕覆清刊本）

「雲裡金剛宋萬」（葛飾前北斎爲一筆『繪本水滸傳』、文政一二年〔1829〕序、萬極堂梓）

「雲裡金剛宋萬」（仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『肖像水滸銘々傳』前編上、弘化五年〔1828〕不朽堂刻本）

「雲裡金剛宋萬」（江境菴花川編、月岡芳年筆『繡像水滸銘々傳』初編、慶應三年〔1867〕序、大橋堂刻本・蔵板）

うんりゅう 雲龍

【作例】

「雲龍」（『畫本初心柱立』一、正徳五年〔1715〕刊本、寶曆一一年〔1761〕再刊本）

「雲龍」（玉翠斎藤原義包圖『畫圖撰要』卷下、明和三年〔1766〕層山堂刻本）

「雲龍」（『畫圖百珍』下、明治一七年〔1884〕北畠茂兵衛等求版）

「雲龍之圖」（南原桂處薫摹『聚美畫鑒』卷、明治二年〔1889〕芝川又右衛門發行）

「無題」（木風翁文紹編『古今名家畫苑』初編、須原屋等刊本）

え行

えい かんぶしょう 衛瓘撫床

晋の衛瓘（220～281）は、字は伯玉といい、河東の安邑（山西省夏県）の人である。晋武帝（265～290在位）の頃、彼は司空（司徒、司馬と共に「三公」と呼ばれ、皇帝を補佐する三役の一人である）に拔擢され、朝野で名声を得ていた。晋惠帝（290～306在位）が皇太子であった頃、朝廷の重臣たちは皆彼が適任者と思った。衛瓘もそう思ったが、敢えて帝には言わなかった。あるとき、帝が凌雲台で宴会を開催し、衛瓘は酔ったふりをして帝の御座の前行き、手で御座を触りながら、「この御座が惜しい」と言った。帝はすぐ彼の真意がわかり、「あなたが本当に酔っぱらったな」と言った。そこで衛瓘が黙り込んだ。後に惠帝が即位した。皇后である賈氏が衛瓘を死に追い込んだ。（『晋書』卷三十六、列傳第六）

【出典】

〔晋書〕衛瓘字伯玉，河東安邑人。武帝時遷司空，爲政清簡，甚得朝野聲譽。惠帝爲太子，朝臣咸謂純質，不能親政事。瓘每欲陳啓廢之，而未敢發。後會宴凌雲臺，瓘托醉，因跪帝床前曰，臣欲有啓，欲言而止者三。因以手撫床曰，此座可惜。帝悟，因謬曰，公眞大醉邪。瓘不復有言。賈后由是怨之。後告老，進位太保就第。惠帝立，以瓘錄尚書事，賈后素怨瓘，且忌其方直不得聘己淫虐，啓帝作詔，免瓘官，遂被害。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「衛瓘撫床」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編卷五、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行）

えい きまんねん 榮貴萬年

「榮貴萬年」は芙蓉と桂花を描いた絵である。「榮」は「蓉」と同じ

発音「rong」である。「貴」は「桂」と同じ発音「gui」である。栄華と富貴の生活は永遠に続くことを願う意味である。(金井紫雲編『東洋畫題綜覧』参照)

えいけいゆのつま 衛敬瑜妻

霸城(瀟陵)の王整之の姉が衛敬瑜に嫁いだ。彼女は十六歳の頃夫敬瑜が亡くなった。両家の両親は皆彼女に再婚をすすめたが、彼女はそれに応じず、自分の耳を切り取って皿に置き、固い決意を表明した。そのため両親たちは断念した。彼女は亡き夫の墓の前に柏の木を植えたが、その木は忽ちつながるようになり、一年を経ってからまたわかれた。なお、家屋に燕の巣があり、雄と雌が常に一緒に飛んだが、後に一羽だけ出入りするようになった。そこで、雍州の刺史は彼女を表彰するために楼閣を建て、「貞義衛婦之閭」という扁額を書いたという。

【出典】

又霸城 王整之姉嫁爲衛敬瑜妻、年十六而敬瑜亡、父母舅姑咸欲嫁之、誓而不許、乃截耳置盤中爲誓、乃止。遂手爲亡塚種樹數百株、墓前栢樹忽成連理、一年許還復分散。女乃爲詩曰、墓前一株栢、根連復並枝。妾心能感木、頽城何足奇。所住戶有鸞巢、常雙飛來去、後忽孤飛。女感其偏栖、乃以縷繫脚爲誌。後歲此鸞果復更來、猶帶前縷。女復爲詩曰、昔年無偶去、今春猶獨歸。故人恩既重、不忍復雙飛。雍州刺史西昌侯 藻嘉其美節、乃起樓於門、題曰、貞義衛婦之閭。又表於臺。(唐・李延壽撰『南史』卷七十四、列傳第六十四)

【作例】

「衛敬瑜妻」(明・汪氏輯、仇英實甫補圖『列女傳』卷七、乾隆四四年 [1779] 序刊本)
 「衛敬瑜妻」(馬場信意『分類畫本良材』卷四、正徳五年 [1715] 須

原茂兵衛・柏屋四郎兵衛藏板)

えいこう 衛后

↓「衛皇后」

【作例】

「衛后」(馬場信意『分類畫本良材』卷四、正徳五年 [1715] 須原茂兵衛・柏屋四郎兵衛藏板)
 「衛后」(文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年 [1803] 吉田新兵衛・鹿島忠兵衛・鶯頭辰三郎刊本)

えいこうこう 衛皇后

衛皇后(？～前91)、字は子夫といい、河東平陽(山西省臨汾南西)の人である。漢武帝の皇后である。弟衛青は大司馬驃騎將軍であり、姉の子である霍去病は大司馬驃騎將軍である。初めは衛皇后が平陽公主の家の女優であった。武帝が訪ねて行った際、氣に入って連れて帰った。元朔元年(前128)、據を生むことにより皇后になった。元狩元年(前112)、據が太子になった。征和二年(前91)、「巫蠱事件」で太子とともに江充を殺し、さらに軍隊を出して宰相屈釐と戦った。間もなく失敗して、太子が逃げ出し、衛皇后の印綬が武帝に取り上げられた。結局、衛皇后が自殺した。

【出典】

衛皇后字子夫。生微矣。蓋其家號曰衛氏。出平陽侯邑。子夫爲平陽主謳者。武帝初即位。數歲無子。平陽主求諸良家子女十餘人、飾置家。武帝被霸上還。因過平陽主。主見所侍美人。上弗說。既飲。謳者進。上望見、獨說衛子夫。是日武帝起更衣。子夫侍尚衣。軒中得幸。上還坐、驩甚。賜平陽公主金千斤。主因奏子夫、奉送入宮。子夫上車。平陽主拊其背曰。行矣。疆飯勉之。即貴無相忘。入宮歲餘。

竟不復幸。武帝擇宮人不中用者，斥出歸之。衛子夫得見，涕泣請出。上憐之，復幸。遂有身。尊寵日隆。召其兄衛長君、弟青爲侍中。而子夫後大幸有寵。凡生三女一男。男名據。「中略」於是廢陳皇后、而立衛子夫爲皇后。（漢・司馬遷撰『史記』卷四十九、外戚世家第十九）

【作例】

↓「衛后」

えいしゆく 永叔

↓「歐陽修」、「歐陽永叔」

【作例】

「永叔」（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年〔1803〕吉田新兵衛・鹿島忠兵衛・鶯頭辰三郎刊本）

えいしゆくきょう 衛叔卿

衛叔卿は中山の人であり、雲母を服用して仙人となった。漢の元鳳二年（前9）、彼は白鹿に乗って、漢武帝を訪ねた。武帝は「君は誰か」と聞き、叔卿は「中山の衛叔卿だ」と答えた。武帝は「中山の人なら、私の臣下ではないか」と言った。すると、叔卿は急に姿をくましました。武帝は大変後悔し、使者梁伯之を遣って中山に探しに行かせた。そこで度世という叔卿の子を見つけた。武帝は二人を遣って華山に探しに行かせた。度世は父親を見つけたが、帰らずに使者梁伯之とともに五色雲母を服用し仙人となったという。

【出典】

衛叔卿者，中山人也。服雲母得仙。漢元鳳二年八月壬辰，武帝閒居殿上，忽有一人乘浮雲，駕白鹿，集於殿前。帝驚問之爲誰。曰，我中山衛叔卿也。帝曰，中山非我臣乎。叔卿不應，即失所在。帝

甚悔恨，即使使者梁伯之往中山推求，遂得叔卿子。名度世，即將還見。帝問焉。度世答曰，臣父少好仙道，服藥治身八十餘年，體轉少壯，一旦委臣去，言當入華山耳。今四十餘年未嘗還也。帝即遣梁伯之與度世往華山覓之。度世與梁伯之俱上山，輒雨。積數日，度世乃曰，吾父豈不欲吾與人俱往乎。更齋戒獨上，望見其父與數人於石上嬉戲，度世既到，見父上有紫雲，覆歷鬱鬱，白玉爲床，有數仙童執幢節，立其後。度世望而再拜，叔卿問曰，汝來何爲。度世具說天子悔恨不得與父共語，故遣使者與度世共來。叔卿曰，吾前爲太上所遣，欲戒帝以災厄之期，及救危厄之法，國祚可延，而帝強梁自貴，不識道真，反欲臣我，不足告語，是以棄去。今當與中黃太一共定天元九五之紀，吾不得復往也。度世因曰，向與父博者爲誰。叔卿曰，洪崖先生、許由、巢父、王子晉、薛容也。今世向大亂，天下無聊，後數百年間，土滅金亡，天君來出，乃在壬辰耳。我有仙方，在家西北柱下。歸取，按之合藥服餌，令人長生不死，能乘雲而行，道成來就吾於此，不須復爲漢臣也。度世拜辭而歸，掘得玉函，封以飛仙之香，取而按之餌服，乃五色雲母，并以教梁伯之，遂俱仙去，不以告武帝也。（晉・葛洪撰『神仙傳』卷二）

【作例】

「衛叔卿」（明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷二、萬曆二八年〔1600〕刊本）

「衛叔卿」（寂照主人月僊寫並題『列仙圖贊』二、天明四年〔1784〕寂照寺藏板）

えいせんゆうん 穎川庾蘊

「穎川庾蘊」とは穎川の庾蘊であり、彼は蘭亭曲水の宴に参加する四十二人（一説は四十三人）の中の一人である。

【出典】

↓「蘭亭四十二賢圖」、「蘭亭四十三賢圖」

【作例】

「穎川庾蘊」（文鳳山人「文鳳駿聲」、『文鳳書譜』三編、文化八年〔1811〕
河内屋・吉田屋刊本）

えいせんゆうう 穎川庾友

「穎川庾友」とは穎川の庾友であり、蘭亭曲水の宴に参加する四十二人（二説は四十三人）の中の一人である。

【出典】

↓「蘭亭四十二賢圖」、「蘭亭四十三賢圖」

【作例】

「穎川庾友」（文鳳山人「文鳳駿聲」、『文鳳書譜』三編、文化八年〔1811〕
河内屋・吉田屋刊本）

えいひしうまをかうず 嬴非子養馬圖

嬴非子は大駱の子である。嬴の先祖は顓頊帝の末裔であり、嬴は舜帝より賜った姓である。しかし周武王が紂王を討伐した際、紂王の家臣である嬴惡來を殺した。以来、嬴一族が衰えた。嬴非子の代になって馬を放牧することによって生計を立てた。嬴非子は馬を養殖するのが得意であるので、犬丘の人の推挙により、周孝王のために馬を放牧するようになった。その功績により、周孝王は再び秦という土地を領地として嬴非子に与えた。ゆえに秦嬴を号としたという。

【出典】

非子居犬丘，好馬及畜，善養息之。犬丘人言之周孝王，孝王召使主馬于汧，渭之間，馬大蕃息。孝王欲以為大駱適嗣。申侯之女為大駱妻，生子成爲適。申侯乃言孝王曰，昔我先驪山之女，為戎胥軒妻，生中湏，以親故歸周，保西垂，西垂以其故和睦。今我復與大駱妻，生適

子成。申駱重婚，西戎皆服，所以爲王。王其圖之。於是孝王曰，昔伯翳爲舜主畜，畜多息，故有土，賜姓嬴。今其後世亦爲朕息馬，朕其分土爲附庸。邑之秦，使復續嬴氏祀，號曰秦嬴。亦不廢申侯之女子爲駱適者，以和西戎。（漢・司馬遷撰『史記』卷五，秦本紀第五）

【作例】

「嬴非子牧馬受封」（明・余邵魚撰『片璧列國志』、崇禎年間〔1638〕
～1644〕金閨五雅堂刊本）

「嬴非子養馬圖」（橋有税「橋氏宗兵衛」、『繪本寫寶袋』卷五、享保五年〔1720〕稱航堂板、明和七年〔1770〕須原屋・柏原屋再板）

えいゆうどくりつ 英雄獨立

鷹の絵とされるが、實際雄オスの鶏の絵としてよく描かれる。（金井紫雲撰『東洋畫題綜覽』参考）

【作例】

「英雄獨立」（清・鄭績繪編『夢幻居畫學簡明』、同治年間〔1862〕
1874〕刊本）

えおん 慧遠

釋慧遠（334～416）は元が賈の姓で、雁門婁煩（山西省寧武の付近）の生まれである。子供の頃、慧遠は勉強が好きで、十三歳の時に叔父令狐氏について洛陽に遊学した。故に弱冠でありながら儒学生になった。慧遠は六経を博し、とりわけ老莊の学問に詳しい。心が広く、世俗に無縁である。儒者や英才たちには彼を敬服しない人がいない。二十一歳の頃、江東に渡り、范宣子について学びたかったが、あいにくその時石虎が亡くなり、中原が混乱したため、南の道が不通となった。ちようど釋道安は恒山に寺院を作り、仏法を弘揚し、名声をあげた。慧遠は早速道安のところに行った。道安を自分の師として敬った。し

かしながら後に道安の『波若經』の説法を聞き、豁然大悟となり、「儒・道・九流は皆秕糠である」と嘆いた。すると、弟慧持と一緒に初心に戻り授業を受け、昼も夜も一生懸命に仏典を勉強した。沙門曇翼はいつも灯油の資金を援助した。道安は「仏法を東に伝えられるのは、まさに恵遠ではないか」と称賛した。恵遠は二十四歳の頃、説法し始めた。受講者に質疑がある場合、恵遠は仏典にこだわらず、莊子のことばで分かりやすく説明したりした。したがって皆の好評を得た。道安の弟子も恵遠のことを敬服していた。前秦の建元九年(373)、道安は弟子たちを連れ、南へ樊河に遊学しようとした。しかし途中で朱序に拘束された。そこで道安は弟子の一部を恵遠に分け、南へ続けて行くように指示した。すると、恵遠は数十人の弟子たちと一緒に南の荊州へ行き、上明寺で落ち着いた。後に羅浮山に行こうとしたが、途中潯陽に着いた時に、雄大な廬山を見て気が変り、龍泉精舎に住み着いた。精舎が水源地から遠いので、恵遠が杖をもって地面を叩きながら言った。「もしここで住めるならば、泉が出るはず」と。言い終わると、泉が地面から湧いてきて、ついに溪流となった。恵遠はいつも表情が嚴肅で、容姿がきちんとしている。およそ彼を見た人は皆体が震える。ある沙門は恵遠に竹の如意を奉納したが、恵遠の顔を見て怖くなり、結局、言えなくて如意を宿泊の部屋に残して、こっそりと帰った。恵遠は廬山に三十余年住み、山を出ることは一度もなかった。客をいつも虎溪までしか送らなかつた。四一六年八月、恵遠は病氣になり、弟子たちは鼓酒を勧めたが、受け付けなかつた。また米汁を勧めたが、やはり受け付けなかつた。また蜂蜜の水を勧めたが、今度は、經典を調べさせ、飲むべきかという答案を見つけてくださいと指示した。しかしながら、調べの途中で、恵遠は逝去された。年は八十三歳であった。文集十二卷が世に伝えられているという。(金井紫雲編『東洋画題綜覧』参照)

【出典】

釋慧遠、本姓賈氏、雁門婁煩人也。弱而好書，珪璋秀發。年十三隨舅令狐氏遊學許洛。故少爲諸生，博綜六經，尤善莊老。性度弘博，風鑿朗拔，雖宿儒英達，莫不服其深致。年二十一，欲渡江東，就范宣子共契嘉遁。值石虎已死，中原寇亂，南路阻塞，志不獲從。時沙門釋道安立寺於太行恆山，弘贊像法，聲甚著聞，遠遂往歸之。一面盡敬，以爲眞吾師也。後聞安講波若經，豁然而悟，乃歎曰，儒道九流，皆糠粃耳。便與弟慧持，投簪落彩，委命受業。既入乎道，厲然不羣，常欲總攝綱維，以大法爲己任。精思諷持，以夜續晝，貧旅無資，繼續常闕。而昆弟恪恭，終始不懈。有沙門曇翼，每給以燈燭之費，安公聞而喜曰，道士誠知人矣。遠藉解於前因，發勝心於曠劫，故能神明英越，機鑿遐深。安公常歎曰，使道流東國，其在遠乎。年二十四，便就講說。嘗有客聽講，難實相義，往復移時，彌增疑味。遠乃引莊子義爲連類，於是惑者曉然，是後安公特聽慧遠不廢俗書。安有弟子法遇、曇徽，皆風才照灼，志業清敏，並推服焉。後隨安公南遊樊河。僞秦建元九年，秦將苻丕寇斥襄陽，道安爲朱序所拘，不能得去，乃分張徒衆，各隨所之。臨路諸長德皆被誨約，遠不蒙一言，遠乃跪曰，獨無訓勗，懼非人例。安曰，如公者豈復相憂。遠於是與弟子數十人，南適荊州，住上明寺。後欲往羅浮山，及屆潯陽，見廬峯清靜，足以息心，始住龍泉精舎。此處去水大遠，遠乃以杖扣地曰，若此中可得棲，立當使朽壤抽泉。言畢清流湧出，後卒成溪。「中略」遠神韻嚴肅，容止方稜，凡預瞻視。莫不心形戰慄。曾有沙門持竹如意，欲以奉獻，入山信宿，竟不敢陳，竊留席隅，默然而去。「中略」自遠卜居廬阜三十餘年，影不出山，跡不入俗。每送客遊履，常以虎溪爲界焉。以晉義熙十二年八月初動散，至六日困篤，大德耆年，皆稽顙請飲鼓酒，不許。又請飲米汁，不許。又請以蜜和水爲漿，乃命律師，令披卷尋文，得飲與不，卷未半而終，春秋八十三矣。(梁

・釋慧皎撰『高僧傳』卷六)

【作例】

↓「惠遠法師」

えおんほうじ 慧遠法師

↓「慧遠」

【作例】

「惠遠法師」(橘有税『繪本故事談』卷六、正徳四年[1714]稱航堂

刊本)

えか 慧可

二祖の慧可(487-593)は武牢(河南省洛陽の東)の生まれで、元の姓は姫という。父親はまだ子供に恵まれなかったとき、いつも「我が家は善を崇めているので、まさか子宝に恵まれないことはないだろう」と祈っていた。ある日の夜、不思議な光が室内を照らしたことを感じた。そこで慧可の母親が妊娠した。慧可が生まれてから、室内を照らした縁起で、両親が彼に光と名づけた。幼い頃から志が高く、書を博覧していた。とりわけ玄理に精通した。一方彼は家の仕事をせず、山水を彷徨うのが好きであった。後に仏典を読み、悠々自適であった。洛陽龍門の香山に行き、寶靜禪師に帰依し、永穆寺で出家した。後に四方に遊学して、大・小乗の仏典を読み漁った。三十二歳の頃、香山に戻り、終日座禅していた。さらに八年間が経つと、静寂の中で突然一人の神人が見えた。神人は言った。「正果を成就したいのに、なぜここでぐずぐずしているのか。大道がそう遠くないので、早く南へ行きなさい」と。慧可は神様が助けてくれるのが分かり、「神光」と改名した。翌日、何かに刺されたように頭痛が起きた。慧可の師が治してあげようとしたが、空中が「それは骨を入れ替えるので、普通

の痛みではない」との声が聞こえた。そこで慧可は神人を見た経緯を師に話した。師はその頭のてっぺんをよく見ると、何と五つの峯のような形の瘤が出てきたのである。すると、師は「これは縁起のいい兆しだ。必ずや正果を成就する。神様は汝を南へ行かそうとは、少林寺の達磨大師はあなたの師になるはずだ」と言った。慧可は師の言葉を受け、少室山へ行き、ついに達磨の法衣を受け継ぎ、禅宗の二祖となった。(金井紫雲編『東洋書題綜覧』参照)

【出典】

二祖慧可大師者、武牢人也。姓姫氏。父寂、未有子時、嘗自念言、我家崇善、豈令無子。禱之既久、一夕感異光照室、其母因而懷妊。及長、遂以照室之瑞、名之曰光。自幼志氣不羣、博涉詩書、尤精玄理、而不事家產、好遊山水。後覽佛書、超然自得。即抵洛陽龍門香山、依寶靜禪師、出家受具於永穆寺。浮游講肆、徧學大小乘義。年三十二、卻返香山、終日宴坐。又經八載、於寂默中倏見一神人謂曰、將欲受果、何滯此邪。大道匪遙、汝其南矣。祖知神助、因改名神光。翌日、覺頭痛如刺、其師欲治之。空中有聲曰、此乃換骨、非常痛也。祖遂以見神事白于師、師視其頂骨、即如五峯秀出矣。乃曰、汝相吉祥、嘗有所證。神令汝南者、斯則少林達摩大士必汝之師也。祖受教、造於少室。其得法傳衣事蹟、達磨章具之矣。(宋・普濟撰『五燈會元』卷一、東土祖師)

えかだんぴ 慧可断臂

慧可は少林寺に行き、達磨大師を訪ね、朝から晩まで参禅する。しかしながら達磨はいつも壁に向かって端座し、まったく慧可に話そうとしない。慧可は「昔の人は修行するのに、骨を叩いて骨髓を取ったり、血を出して飢えを忍んだり、髪で泥を抑えたり、身を投げて虎の餌になったりした。昔からこのように厳しく修行したのに、ましてや

私だろう」と自ら励ました。その年の十二月九日の夜、大雪が降り、慧可は直立して少しも動かない。夜明けの時に、積雪はすでに膝まで積もっていた。祖は不憫に思い、「汝が長く雪中に立つて、何を求めているか」と尋ねた。慧可は涙ながら「師に慈悲をお願いし、甘露の門を開き、広く群品を濟度してほしい」と祖は言った。「諸仏は無上の妙道があり、いつまでも精進しなければならぬ。できないことをできるようにし、我慢できないことを我慢するようにする。小徳小智をもって、軽心慢心をし、仏の真理を得ようとするのは無駄骨だけである」と。光は祖の言葉を聞き、ひそかに刃物を取り、自ら左腕を切断して、祖の前に置いた。祖は彼が法器であるのが分かり、そこで、「諸仏は最初道を求めるが、法のために形を忘れ、汝が今私の前で腕を切断して道を求める決心を示すので必ず実現できる」と。祖は遂に彼の名前を慧可に改名した。

【出典】

時有僧神光者、曠達之士也。久居伊洛、博覽羣書、善談玄理。每歎曰、孔老之教、禮術風規、莊易之書、未盡妙理。近聞達磨大士住止少林、至人不遙、當造玄境。乃往彼、晨夕參承。祖常端坐面壁、莫聞誨勵。光自惟曰、昔人求道、敲骨取髓、刺血濟饑、布髮掩泥、投崖飼虎、古尚若此、我又何人。其年十二月九日夜、天大雨雪、光堅立不動、遲明積雪過膝。祖憫而問曰、汝久立雪中、當求何事。光悲淚曰、惟願和尚慈悲、開甘露門、廣度羣品。祖曰、諸佛無上妙道、曠劫精勤、難行能行、非忍而忍。豈以小徳小智、輕心慢心、欲冀真乘、徒勞勤苦。光聞祖誨勵、潛取利刀、自斷左臂、置於祖前。祖知是法器、乃曰、諸佛最初求道、爲法忘形、汝今斷臂吾前、求亦可在。祖遂因與易名慧可。（宋・普濟撰『五燈會元』卷一、東土祖師）

えきすいせきべつ 易水惜別

燕国の太子丹は、秦の始皇帝を暗殺するために、荊軻と秦舞陽に依頼した。出発した際、太子丹と賓客および関係者たちは皆白衣を着て白い帽子をかぶって易水の川辺まで見送りに行った。神様を祭った後、高漸離が筑（楽器の一種）を叩いて曲を演奏し、荊軻がそれに合わせて歌った。その場の雰囲気は悲愴で、人々は皆泣いた。その歌は「風蕭蕭兮易水寒、壯士一去兮不復還」（風蕭蕭とふきて易水寒く壯士一去かば復たび還らず）という。歌が激昂になり、皆は目を丸くし、髪の毛が冠を押し上げるほどであった。そこで、荊軻は車に乗り、ついに振り返りもしなかった。（金井紫雲編『東洋畫題綜覧』参考）

【出典】

太子及賓客知其事者、皆白衣冠以送之、至易水之上。既祖取道。高漸離擊筑、荊軻和而歌、爲變徵之聲。士皆垂淚涕泣。又前而爲歌曰、風蕭蕭兮易水寒、壯士一去兮不復還。復爲羽聲愴慨。士皆瞋目、髮盡上指冠。於是荊軻就車而去、終已不顧。（漢・司馬遷撰『史記』卷八十六、刺客列傳第二十六）

【作例】

「太子送荊軻入秦」（『全相秦併六国平話』、至治年間 [1321 - 1323] 建安虞氏刊本）

「易水送別」（駱賓王「易水送別」、石峯橋貫書畫「畫本唐詩選」一編、天明八年 [1788] 序、文化二年 [1805] 嵩山房刊本）

えつおうだい 粵王臺

粵王台は今日の広州にあり、漢の南粵王趙陀が建てたのである。台の上に五階建ての樓閣があり、遠くの山や海が見える。

【出典】

粵王臺在今廣州治、漢南粵王趙陀所建。上有五層之樓、控連山、望遠海、嶺表奇觀也。宋之間詩云、江上粵王臺、登高望幾回、南

天外合、北戸日邊開。張九齡詩云、城隅百雉映、水曲萬家開。里樹
枕柳出、時禽翡翠來。二詩足以盡臺之勝矣。(明・王圻、王思義撰『三
才圖會』地理十二卷)

【作例】

「粵王臺圖」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理十二、萬曆三七
年 [1609] 刊本)

「粵王臺」(法眼橋保国『繪本詠物選』卷二、安永七年 [1778] 序、
安永八年 [1779] 山崎金兵衛・渋川與左衛門刊本)

えのう 慧能

六祖慧能大師(638～713)は、俗姓は盧という。その祖先は范陽(河
北省涿県)の人である。父親の名前は行瑄といい、武徳年間(618～
626)海南の新州(広東省新興)に左遷され、ついにそこに籍を置いた。
師は三歳の頃父親と死別した。母親は再婚せず慧能を育てた。家は大
変貧しく、慧能は薪を伐採することにより、家計を助けた。ある日、
慧能は薪を背負って、市場に行った。そこで客が『金剛經』を讀んで
いる声が聞えた。慧能は「應無住而生心」の文言を聞いた時に、悟っ
たように感じ、「それは何の法でしょうか。だれにもらったのでしょ
うか」と客に尋ねた。客は「これは『金剛經』で、黄梅弘忍大師にも
らったのです」と答えた。それを聞き、慧能は家に帰り、母親に法の
ために師を訪ねる決意を告げた。弘忍大師は慧能に会った途端、すぐ
法器であることがわかった。慧能は後に弘忍大師から法衣を受け、六
祖となった。弘忍大師が亡くなった後、慧能は韶州の広果寺に住んだ。
韶州のあたりは昔虎や豹が多かったが、慧能が住んでから、虎や豹が
急にいなくなったという。先天二年七月一日に六祖は門人に「私は新
州に帰りたい。速やかに準備してください」と言った。その時、民衆
は皆師を慕い、思いとどまるよう懇願した。六祖は言った。「諸仏が

現れても、なおかつ涅槃を示します。来ることがあれば必ず去ること
があります。理もそれと同じです。私の体は必ず帰るところがありま
す」と。皆は言った。「師は今行くのと、いずれ帰ってください」と。
六祖は言った。「落葉帰根。帰るとは約束しません」と。皆はまた聞
いた。「師の法衣はどなたに伝えますか」と。師は言った。「道をもつ
ている者はもらいます。無心者にはわかりません」と。また聞いた。「後
に難がありますか」と。六祖は言った。「私は亡くなって五、六年後、
一人が私の頭を取りに来るはずですよ。次の言葉がよく覚えてください。
それは「頭の上にも両親を養い、口の中に食べ物を入れ、難が一杯にな
ると、楊柳が官となります」といいます」と。さらに言った。「私が
去ってから七十年後、二人の菩提が東方から来ます。一人は在家。一
人は出家。二人は同時にわが宗を中興します」と。言い終わると、新
州国恩寺に行き、沐浴して結跏趺坐の姿で涅槃した。年は七十六であつ
た。六祖の『壇經』が世に伝えられている。(金井紫雲編『東洋畫題
綜覽』参照)

【出典】

六祖慧能大師者、俗姓盧氏、其先范陽人。父行瑄、武徳中左官於海
南之新州、遂占籍焉。三歳喪父、其母守志。鞠養及長、家尤貧窶、
師樵採以給。一日負薪至市中、聞客讀金剛經、至應無所住而生其心、
有所感悟、而問客曰、此何法也、得於何人。客曰、此名金剛經、得
於黄梅 忍大師。祖遽告其母以爲法尋師之意。「中略」忍大師一見、
默而識之。後傳衣法、令隱于懷集 四會之間。「中略」先天二年七月
一日、謂門人曰、吾欲歸新州、汝速理舟楫。時大衆哀慕、乞師且住。
祖曰、諸佛出現、猶示涅槃。有來必去。理亦常然。吾此形骸、歸必
有所。衆曰、師從此去、早晚卻回。祖曰、落葉歸根、來時無口。又
問、師之法眼、何人傳受。祖曰、有道者得、無心者通。又問、後莫
有難否。祖曰、吾滅後五六年、當有一人來取吾首。聽吾記曰、頭上

養親，口裏須殮，遇滿之難，楊柳爲官。又曰，吾去七十年，有二菩薩從東方來，一在家，一出家。同時興化，建立吾宗。締緝伽藍，昌隆法嗣。言訖，往新州國恩寺，沐浴跣趺而化，異香襲人，白虹屬地。卽其年八月三日也。時詔新兩郡，各修靈塔，道俗莫決所之。兩郡刺史，共焚香祝曰，香煙引處，卽師之欲歸焉。時鑪香騰湧，直貫曹溪。以十一月十三日入塔，壽七十六。（宋・普濟撰『五燈會元』卷一，東土祖師）

えびをあたえてりぎよをつる 與蝦釣鯉魚

【作例】

「與蝦釣鯉魚」（法橋玉山畫『畫本玉藻譚』卷二、文化二年〔1865〕刊本）

えみどりにしてとりいよいよしらく 江碧鳥逾白

唐の杜甫の「絶句」という五言絶句を凶解する絵である。

【出典】

江碧鳥逾白，山青花欲然「燃」，今春看又過，何日是歸年。（杜甫「絶句」，明・李攀龍編『唐詩選』卷六・五言絶句）

【作例】

「江碧鳥逾白」（『百人一詩畫譜』、有斐堂・玉樹堂原刻、寛政六年〔1794〕再刻本）

「江碧鳥逾白」（石峯先生書画『畫本唐詩選』一編、天明八年〔1788〕嵩山房原刻、文化二年〔1865〕再刻本）

えんおう 袁盎

袁盎（?～前186）はまた爰盎ともいう。字は絲しといい、楚その人である。漢文帝（前180～前157在位）の頃、盎は郎中（近侍の臣）で、

尚書を補佐する官職）であった。淮南王劉長が審食其を殺して、驕つた際、盎が文帝に建言し、劉長の領地を減らして抑えた。後に劉長が反乱の計画が発覚され、自殺した。盎が文帝に建言し、劉長の領地を三分にしてその三人の子供に分けた。そのため、盎が名声をあげた。後に梁孝王劉武が太子になることを盎が阻止したので、劉武が人を遣つて盎を暗殺した。

【出典】

袁盎者，楚人也。字絲。父故爲羣盜，徙處安陵。高后時，盎嘗爲呂祿舍人。及孝文帝卽位，盎兄噲任盎爲中郎。絳侯爲丞相，朝罷趨出，意得甚。上禮之恭。常自送之。袁盎進曰，陛下以丞相何如人。上曰，社稷臣。盎曰，絳侯所謂功臣，非社稷臣。社稷臣，主在與在，主亡與亡。方呂后時，諸呂用事，擅相王。劉氏不絕如帶。是時絳侯爲太尉，主兵柄，弗能正。呂后崩，大臣相與共畔諸呂。太尉主兵，適會其成功。所謂功臣，非社稷臣。丞相如有驕主色，陛下謙讓，臣主失禮。竊爲陛下不取也。後朝，上益莊。丞相益畏。已而絳侯望袁盎曰，吾與而兄善，今兒廷毀我。盎遂不謝。及絳侯免相之國，國人上書，告以爲反。徵繫清室。宗室諸公莫敢爲言。唯袁盎明絳侯無罪。絳侯得釋，盎頗有力。絳侯乃大與盎結交。淮南厲王朝，殺辟陽侯，居處驕甚。袁盎諫曰，諸侯大驕，必生患。可適削地。上弗用。淮南王益橫。及棘蒲侯柴武太子謀反，事覺，治。連淮南王。淮南王徵。上因遷之蜀。轎車傳送。袁盎時爲中郎將。乃諫曰，陛下素驕淮南王，弗稍禁，以至此。今又暴摧折之。淮南王爲人剛。如有遇霧露行道死，陛下竟爲以天下之大弗能容，有殺弟之名。奈何。上弗聽。遂行之。淮南王至雍病死。聞，上輟食哭甚哀。盎入頓首請罪。上曰，以不用公言至此。盎曰，上自寬。此往事，豈可悔哉。且陛下有高世之行者三。此不足以毀名。「中略」於是上乃解曰。將奈何。盎曰。淮南王有三子。唯在陛下耳。於是文帝立其三子，皆爲王。盎由此名重朝廷。

〔中略〕梁王欲求爲嗣。袁盎進説。其後語塞。梁王以此怨盎。曾使人刺盎。刺者至關中間袁盎。諸君譽之皆不容口。乃見袁盎曰。臣受梁王金來刺君。君長者。不忍刺君。然後刺君者十餘曹。備之。袁盎心不樂。家又多怪。乃之楳生所問占。還。梁刺客後曹輩，果遮刺殺盎。安陵郭門外。（漢・司馬遷撰『史記』卷一百一，袁盎晁錯列傳第四十一）

【作例】

「袁盎」（馬場信意『分類書本良材』巻二、正徳五年〔1715〕須原茂兵衛・柏屋四郎兵衛藏板）

えんおうげぎざ 袁盎卻坐

漢の袁盎（?～前180）は漢文帝の頃の中郎将である。帝が上林苑を御幸した際、皇后と慎夫人が同行し、いつも一緒に座っていた。ところが、後に袁盎の役所に訪ねた際、盎が慎夫人の座を引きしりぞいた。夫人が大変怒って席に着こうとしなかった。帝も怒って立ち上がった。盎は帝に言った。「上下の秩序があつて、すべてがうまく行きます。今、陛下には皇后がいるので、慎夫人はすなわち妾となります。地位が異なるのに、同じように座つてはなりません。今陛下の行動が夫人のためですが、実は夫人に災いをもたらしかねません。陛下も戚夫人のことを聞いていると思いますが」と。帝が納得し、慎夫人を悟らせた。そこで夫人も理解を示し、盎に黄金五十斤を賜つた。

↓「袁盎」

【出典】

前漢 袁盎字絲，安陵人。孝文時爲中郎將，上幸上林，皇后、慎夫人從。其在禁中，常同坐。及坐郎署，盎引卻夫人坐，夫人怒不肯坐，上亦怒起。盎因前説曰，臣聞尊卑有序，則上下和。今陛下既已立后，夫人適妾。主豈可同坐哉。且陛下幸之則厚賜之。陛下所以爲慎夫人，

適所以禍之也。獨不見人豕乎。上適説，入語慎夫人。夫人賜盎金五十斤。然亦以數諫不得久居中。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「袁盎卻坐」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編巻五、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行）

えんかいのず 宴会圖

【作例】

「宴會圖」（信天翁月岡法橋雪鼎纂『和漢名筆金玉畫府』巻六・補遺、明和八年〔1771〕寶文堂刻本）

えんきこく 焉耆國

焉耆國（新疆ウイグル自治区焉耆回族自治県、巴音郭勒蒙古自治州のあたりの地域）は西域の古国である。国王の姓は龍という。男の人は散髪する。女の人は短い上着と大きな袴を着る。土地が肥沃で葡萄を産出する。

【出典】

焉耆國，王治員渠城，去長安七千三百里。戶四千，口三萬二千一百，勝兵六千人。擊胡侯、卻胡侯、輔國侯、左右將、左右都尉、擊胡左右君、擊車師君、歸義車師君各一人，擊胡都尉、擊胡君各二人，譯長三人。西南至都護治所四百里，南至尉犁百里，北與烏孫接。近海水多魚。（漢・班固撰『漢書』巻九十六下，西域傳第六十六下）
焉耆國元日、二月八日婆摩遮，三日野祀，四月十五日遊林，五月五日彌勒下生，七月七日祀先祖，九月九日床撒，十月十日王爲厭法，王出首領家，首領騎王馬一日一夜，處分王事。十月十四日作樂至歲窮拔汗那。十二月及元日，王及首領分爲兩朋，各出一人着甲，衆人執瓦石棒杖，東西互擊，甲人先死即止，以占當年豐儉。（明・王圻、

王思義撰『三才圖會』人物十二卷）

【作例】

「焉耆國」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十二卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本）

「焉耆國」（寺島良安撰『和漢三才圖會』卷十四、正徳三年 [1713] 序、杏林堂蔵板）

「焉耆國」（橋有税圖書『唐土訓蒙圖彙』卷五、享保四年 [1719] 寶文堂刊本）

えんきやくきゆうじゆ 淵客泣珠

伝えることによると、昔鮫人が水中から出てきて、人の家の下宿し、生糸の商売をしていた。海に帰る際、感謝の印として、鮫人が目から涙のようなものを大皿にいっぱい流した。その涙はすなわち真珠である。淵客とは鮫人のことである。彼らは南海で生活しながら、機織りの仕事もしていたという。

【出典】

舊注引博物志云、鮫人從水中出、向人家寄住、積日賣絹、臨去從主人索器、泣而出珠、滿盤以與主人。今本無載。左思吳都賦云、皇室潛織而卷絹、淵客慷慨而泣珠。淵客蓋鮫人也。述異記曰、南海中有鮫人室、水居如魚。不廢機織、其眼能泣則出珠。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「淵客泣珠」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編卷十、享和元年 [801] 序刊本、河内屋等發行）

えんけいほうたい 剡溪訪戴

晋の王子猷（徽之）は山陰（浙江省紹興）に住んでいた頃、ある日の夜に大雪が降り、夜中に目が覚め、窓を開けて、外の景色を見なが

ら酒を飲んだ。時に外は真つ白になり、立ち上がって左思の『招隱』の詩を詠った。ふつと戴安道（逵）のことを懐かしく思った。戴はその頃剡溪（浙江省嵊州の南）に住んでいたため、子猷は早速小舟に乗り、一晩でやっと剡溪に辿り着いた。しかしながら戴の自宅に入らずに元の道に戻った。人は不思議にその原因を尋ねた。子猷は「私はもともと興に乗じてきたので、興を尽くしたから帰る。もう戴に会う必要がない」と答えた。

【出典】

嘗居山陰、夜雪初霽、月色清明、四望皓然。獨酌酒詠左思招隱詩、忽憶戴逵。逵時在剡、便夜乘小船詣之、經宿方至、造門不前而反。人問其故、徽之曰、本乘興而來、興盡而反、何必見安道邪。（唐・房玄齡等撰『晉書』卷八十、列傳第五十）

【作例】

「雪夜訪戴」（王念慈編『当代名畫大觀』初集第三冊、中国古畫譜集成第十五卷、山東美術出版社、2000年）

えんこう 袁宏

晋の袁宏（328～376）は、字は彦伯といい、また虎ともいう。彼は陳郡の陽夏（河南省太康）の人である。宏は文章が得意で、かつて詠史詩を書き、自分の気持ちを託したことがある。幼い頃、貧しくて船の輸送業に従事した。謝尚の軍隊が牛渚に駐屯した時、秋の夜、謝尚が部下たちと私服をして船に乗り秋月を楽しんでいるところ、ちょうど袁宏が船の中で詩吟をしていた。声が大変清々しく、詩句も抜群である。ついに船を止めて聞いてしまった。そこで、部下を遣って尋ねたところ、「袁臨汝（臨汝が地名である。袁宏の父親はかつてその地方長官であった。―編者注）が詩吟をしたのだ」との返事であった。その詩はすなわち詠史の作である。尚は早速船まで招き、宏と朝

まで話した。それ以来、宏の名声が益々高くなった。尚は安西將軍、豫州刺史になり、宏を幕僚として拔擢した。宏は出世が順風満帆で、大司馬桓温府の記室まで昇進した。温は宏の文筆を生かし、もっぱら書記の仕事に従事させた。後に宏は『東征賦』を作った。賦の最後に川を渡った功勞者の名前を列挙したが、桓彝の名前だけが載っていない。宏の友人伏濤も温府に勤めているので、彼は宏を桓彝の名前を入れるように説得したが、宏はただにっこりして何も言わなかった。後に温がそのことを知り、大變立腹した。しかし宏は当時大變有名な文豪だったので、公に聞けなかった。ある日、山遊びに行き、帰りに宏を同乗するよう命じた。皆が心配した。数里を走ったら温は宏に聞いた。「君が『東征賦』を作ったそうだが、よく先賢たちを称賛したように、なぜ私の父親を取り上げなかったか」と。宏は言った。「あなたのお父様の正式の呼び方は部下の私に勝手に言えないので、敢えて作品にはつきり表現しなかった」と。温は信じないので、また聞いた。「では、君はどのように表現したか」と。宏は即座に「風鑿散朗、或搜或引、身雖可亡、道不可隕、宣城之節、信義為允也」と答えた。温はそれを聞いて涙を流した。宏の賦はまた陶侃のことをとりあげなかったため、侃の子である胡奴は宏を室内に誘い込み、刀を持って宏を責めた。宏は怖くなり、「私はすでに称賛したのに、なぜ取り上げなかったのか」と弁解しながら、「精金百汰、在割能斷、公以濟時、職思靜亂、長沙之勲、為史所贊」と暗誦した。胡奴はやつと納得した。太元初年、東陽で亡くなり、年は四十九歳であった。

【出典】

袁宏字彦伯，侍中猷之孫也。父勳，臨汝令。宏有逸才，文章絕美，曾為詠史詩，是其風情所寄。少孤貧，以運租自業。謝尚時鎮牛渚，秋夜乘月，率爾與左右微服泛江。會宏在舫中諷詠，聲既清會，辭又藻拔，遂駐聽久之，遣問焉。答云，是袁臨汝郎誦詩。即其詠史之作

也。尚頃率有勝致，即迎升舟，與之譚論，申旦不寐，自此名譽日茂。尚為安西將軍、豫州刺史，引宏參其軍事。累遷大司馬桓温府記室。温重其文筆，專綜書記。後為東征賦，賦末列稱過江諸名德，而獨不載桓彝。時伏滔先在温府，又與宏善，苦諫之。宏笑而不答。温知之甚忿，而憚宏一時文宗，不欲令人顯問。後游青山飲歸，命宏同載，眾為之懼。行數里，問宏云，聞君作東征賦，多稱先賢，何故不及家君。宏答曰，尊公稱謂非下官敢專，既未遑啓，不敢顯之耳。温疑不實，乃曰，君欲為何辭。宏即答云，風鑿散朗，或搜或引，身雖可亡，道不可隕，宣城之節，信義為允也。温泫然而止。宏賦又不及陶侃，侃子胡奴嘗於曲室抽刃問宏曰，家君勳跡如此，君賦云何相忽。宏窘息急，答曰，我已盛述尊公，何乃言無。因曰，精金百汰，在割能斷，功以濟時，職思靜亂，長沙之勲，為史所贊。胡奴乃止。「中略」性強正亮直，雖被温禮遇，至於辯論，每不阿屈，故榮任不至。與伏滔同在温府，府中呼為袁伏。宏心恥之，每歎曰，公之厚恩未優國士，而與滔比肩，何辱之甚。「中略」太元初，卒於東陽，時年四十九。（唐・房玄齡等撰『晉書』卷九十二，列傳第六十二）

袁虎少貧，嘗為人備載運租。謝鎮西經船行，其夜清風朗月，聞江渚間估客船上，有詠詩聲，甚有情致。所誦五言，又其所未嘗聞，歎美不能已。即遣委曲訊問，乃是袁自詠所作詠史詩。因此相要，大相賞得。「中略」桓宣武北征，袁虎時從，被責免官。會須露布文，喚袁倚馬前，令作。手不輟筆，俄得七紙，絕可觀。東亭在側，極歎其才。袁虎云，當令齒舌間得利。（南朝宋・劉義慶撰『世說新語』文學第四）

【作例】

「袁宏」〔橋有税〕『繪本故事談』卷八、正徳四年〔1717〕稱航堂刊本）

えんこう 猿猴

迦戸という国に波羅奈という城がある。その中に五百匹の猿がいる。

猿たちは林の中を遊び、尼俱律という木まで行った。木下に井戸があり、井戸の中に月さまが見える。そこで、猿の王様が言った。「月さまが井戸に落ち、今にも死にそうだ。皆で助けてあげよう。でないとい、真つ暗の長い夜になるぞ」と。しかし皆はどうしたらいいかわからない。猿の王様は「僕は木の枝を捕まえ、君が僕の尻尾を捕まえ、皆が同じ方法で繋いでいけば、月さまを救いだせるぞ」と提案した。すると、猿たちが行動を始めた。やっと水面に近付きそうとしたところ、木の枝が折れてしまった。猿たちが一斉に井戸に落ちてしまった。

【出典】

有城名波羅奈。國名伽尸。於空閒處有五百獼猴。遊行林中。到一尼俱律樹。樹下有井。井中有月影現。時獼猴主見是月影。語諸伴言。

月今日死落在井中。當共出之。莫令世間長夜闇冥。共作譏言。云何能出。時獼猴主言。我知出法。我捉樹枝。汝捉我尾。展轉相連。乃可出之。時諸獼猴即如主語。展轉相捉。小未至水。連獼猴重。樹弱枝折。一切獼猴墮井水中。（東晉・佛陀跋陀羅共法顯譯「摩訶僧祇律」卷第七、『大正新脩大藏經』第二十二卷・律部一）

【作例】

「猿猴」〔玉翠齋藤原義包圖「畫圖撰要」卷中、明和二年〔1766〕層山堂刻本〕

「猿猴」〔法橋春卜畫「和漢名筆畫本手鑿」、享保五年〔1720〕序・跋、前川文榮堂梓、文榮堂藏板〕

「猿猴」〔橋有税「繪本故事談」卷一、正徳四年〔1714〕稱觥堂刊本〕

「猿猴」〔「初心畫鑑」昭和三年〔1928〕和泉屋・西村屋再版〕

「猿猴」〔揺月素眞畫「素眞畫譜」初編、安政五年〔1858〕序、探花堂・文會堂刻本〕

「猿猴」〔狩野眞説筆〕〔法眼春卜一翁「和漢名畫苑」四卷、寛延二年〔1749〕序、寶文堂刻本〕

「猿猴」〔牧溪筆〕〔法眼周山編「和漢名筆畫英」卷一、寛延二年〔1749〕序、寛延三年〔1750〕西村源六・洪川清右衛門刊本〕

「猿猴」〔「畫本初心柱立」一、正徳五年〔1715〕新板、寶曆十一年〔1761〕再刻、小林喜右衛門・今井七郎兵衛刊本〕

「猿猴」〔鄰松先生纂、英一蝶筆「群蝶畫英」上、明和六年〔1769〕題言、安永七年〔1778〕山城屋發行〕

「無題」〔猿猴〕〔木風翁文紹寫「古今名家畫苑」初編、須原屋等刊本〕

「猿攫月」〔副孟義編「宋紫石畫譜」卷中、明和二年〔1765〕求古堂梓、須原屋刊本〕

えんこうはくしよ 袁宏泊渚

晋の袁宏（328～376）は、字は彦伯といい、陳郡の陽夏（河南省太康）の人である。謝尚（308～357）が牛渚（安徽省馬鞍山）の行政長官の任期中、部下たちと長江を遊覧した際、近くの舟の中にいる袁宏の詩を吟じる声が聞こえ、袁宏を船内に招き入れて、朝まで歓談した。それが機に、袁宏の名声が確立されたという。（唐・房玄齡等撰「晋書」卷九十二、列傳第六十二）

→「袁宏」

【出典】

晋袁宏字彦伯，陳郡陽夏人。有逸才文章絕美。謝尚時鎮牛渚，秋月乘月，與左右微服泛江。會宏在舫中諷詠。聲清辭文藻拔。遣問焉。即迎升舟，與譚論，申旦不寐。自此名譽日茂。謝安常賞其機對辯速。

後安爲揚州刺史，宏出爲東陽郡，乃祖道於治亭。時賢皆集。安欲以卒迫試之，臨別執其手，顧左右取一扇授之曰，聊以贈行。宏曰，輒當奉揚仁風，慰彼黎庶。時人歎其率而要焉。（唐・李翰撰「蒙求」）

【作例】

「袁宏泊渚」〔下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂「蒙求圖會」初編卷六、

享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行)

えんさんばん 蜒三蠻

蜒三蠻とは魚蜒と蠓蜒と木蜒とのことである。魚蜒は竿で魚を釣るのが得意である。蠓蜒は海に潜り込んで牡蠣を取るのが得意である。木蜒は木を伐採して果実を取るのが得意である。

【出典】

「蜒三蠻以舟爲室，蜒有三，一爲魚蜒，善舉竿垂綸。二爲蠓蜒，善沒海取蠓。三爲木蜒，善伐木取果。蜒極貧，皆鶉衣，得物米妻子共之。冬夏身無一縷，然而各有統焉。(明・王圻，王思義撰『三才圖會』人物十三卷)

【作例】

「蜒三蠻」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)

「蜒蠻」(寺島良安撰『和漢三才圖會』卷十四、正徳三年 [1713] 序、杏林堂蔵板)

「蜒三蠻」(橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷五、享保四年 [1719] 寶文堂刊本)

えんざん 燕山

燕山は玉田県(河北省玉田)の北西二十五里にあり、くねくねと東から伸びてきて数百里ある。

【出典】

燕山。在玉田縣西北二十五里，自西山一帶，迤邐(非麗字，是里字)東來，延袤數百里，抵海岸。(明・李賢等撰『大明一統志』卷一)

【作例】

「燕山」(『名山圖』、崇禎六年 [1633] 墨繪斎刊本)

「燕山」(法眼春卜一翁纂『和漢雙玉丹青錦囊』卷五、寛延二年 [1749] 序、寶曆三年 [1753] 白雲館刻本)

えんざんきりんのず 遠山麒麟之圖

【作例】

「遠山麒麟之圖」(橘有税「橘氏宗兵衛」『繪本寫寶袋』卷九上、享保五年 [1720] 稱航堂板、明和七年 [1770] 須原屋・柏原屋再板)

えんざんび 遠山眉

遠山眉はもともと女性の美しい容姿を形容する言葉として使われていた。例として、かつて漢の司馬相如しばしょうじよとの自由恋愛で有名な卓文君たくぶんくんの容姿に眉の色は遠山を見ることがととの表現がある。後に絵画の用語としても使われるようになった。

【出典】

文君姣好，眉色如望遠山，臉際常若芙蓉，肌膚柔滑如脂，十七而寡，爲人放誕風流，故悅長卿之才而越禮焉。(晉・葛洪撰『西京雜記』卷二)

遠山眉。趙飛燕爲妹合德養髮，號新興髻。爲薄眉，號遠山黛。施小朱，號慵來妝。又玉京記，卓文君眉色不加黛，如遠山。(明・張岱撰『夜航船』卷十三)

遠山爲近山之襯貼。要得穩妥。乃一幅畫中之眉目也。(唐岱撰『繪事發微』「遠山」條)

えんし 剡子

周の剡子は極めて親孝行である。両親が年を取り、ともに両眼の疾患にかかり、鹿の母乳を飲みたいと言っている。剡子は親の意を受け、鹿の皮をかぶって深山に入った。鹿の群れに入り込んで、鹿の母乳を

しほった。しかしながら獵師に見つかり、射殺されそうになった。剡子は実情を告げて、釈放された。そのため、剡子は二十四孝の一人とされる。

【出典】

周 剡子，性至孝。父母年老，俱患雙眼。思食鹿乳。剡子順承親意。乃衣鹿皮去深山。入羣鹿之中取鹿乳。以供親。獵者見而欲射之。剡子具以情告。乃免。〔中華二十四孝〕鹿乳奉親）

【作例】

「鹿乳奉親」〔『新鍔類解官様日記故事大全』卷一、寛文九年〔1691〕和刻本）

「剡子」〔文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年〔1803〕吉田新兵衛・鹿島忠兵衛・鶯頭辰三郎刊本）

「剡子」〔南里亭其樂輯、葛飾戴斗畫『二十四孝圖會』、文政五年〔1821〕河内屋等發行）

「剡子」〔悟足齋固頌書『二十四孝繪抄』天保一三年〔1821〕、須原屋等發行）

えんしき 燕子磯

燕子磯は江蘇省南京の郊外にある。その岩の三面が長江に面し、燕が飛び出そうとする姿のようである。故に「燕子磯」と名付けたとい

【出典】

自觀音巖道舊徑西而數百步，乃至燕子磯，飛崖掠江如燕尾，然亦巖之分脈也。江水抱其三面，以鐵鎖曳磯趾上，植丘亭標之。江上陰風怒號，勢欲飛動，上東山視瓜步羣峯，杳渺如落鴈。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理六卷）

【作例】

「燕子磯」〔明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理六卷、萬曆三十七年〔1609〕刊本）

「燕子磯」〔南巡盛典名勝〕〔森玄黃齋畫『印籠譜』坤、天保一〇年〔1839〕序、清淨軒刊本）

えんじばんしょう 煙寺晚鐘

瀟湘八景の一つである。

↓「瀟湘八景」

えんしょうちくだい 燕昭築臺

燕昭王が即位してから、国を強くするために、四方から賢人を集めたいと思って、臣下の郭隗にその方策を尋ねた。隗は「陛下が本当にその気持ちがあるのなら、まず私から始めてください」と。すると、昭王が隗のために宮殿を作り、師事することにした。そのうち樂毅が魏国から、鄒衍が齊国から、劇辛が趙から燕国にきた。四方の賢人がそれを聞き、皆先を争って燕国にきた。ついに燕国は秦、楚、晋と協力し合って、斉を負かして失った土地を取り戻したのである。

【出典】

〔史記〕燕昭王即位，卑身厚幣，以招賢者，謂郭隗曰，齊國因孤之國亂而襲破燕，孤極知燕小力少，不足以報。然誠得賢士以共國，以雪先王之恥，孤之願也。先生視可者，得身事之。隗曰，王必欲致士，先從隗始。況賢於隗者，豈遠千里哉。於是昭王爲隗改築宮而師事之。樂毅自魏往，鄒衍自齊往，劇辛自趙往，士爭趨燕。後與秦楚三晉合謀伐齊敗之。齊城之不下者，唯聊、莒、卽墨。餘皆屬燕。孔文舉與曹公書曰，昭王築臺以尊郭隗。鮑昭樂府曰，豈伊白璧賜，將起黃金臺。注云，燕昭王置千金於臺上，以延天下之士。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「燕昭築臺」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編卷三、享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行）

えんたんしゅんまい 袁耽俊邁

晋の袁耽（生卒不詳）は字が彦道といい、陳郡の陽夏（河南省太康）の人である。彼は義理の固い人である。桓温（322～373）が若い頃博打に負け、一文無しとなったうえ、負債してしまった。彼が途方に暮れて博打の名人である袁耽を訪ねた。しかし、袁耽が喪中なので、桓温はなかなか言い出しにくかったが、袁耽に事情を話してみた。袁耽が迷いなく変装して桓温と一緒に債主に会い、再び博打の勝負に出た。案の定、袁耽が大勝して桓温を救ったという。（唐・房玄齡等撰『晋書』卷九十八、列傳六十八）

【出典】

晋 袁耽字彦道，陳郡陽夏人。少有才氣。倜儻不羈。爲士類所稱。桓温少時遊於博徒，資産俱盡，尚有負進。思自報之方，莫知所出。欲求濟於耽，而耽在艱。試以告焉。耽暑無難色。遂變服懷布帽，隨温與債主戲。耽素有藝名。債主聞之，而不相識。謂之曰，卿當不辨作袁彦道也。遂就局。俄頃，十萬一賭，直上百萬。耽投馬絕叫，探布帽擲地曰，竟識袁彦道不。其通脫如此。仕爲從事中郎。（唐・李翰撰『蒙求』）

【作例】

「袁耽俊邁」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷五、享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行）

えんたんじょうき 燕丹乗亀

「燕丹乗亀」という画題は、燕の太子丹が秦から脱出した際、途中

秦王が橋を破壊し、丹を暗殺しようとしたが、川に大きな亀が現れ、すると丹が亀に乗って川を渡って難を逃れた伝説に由来するという。しかし史料によると、燕の太子丹が人質として秦に拘束された頃、秦王（後の始皇帝）は丹に傲慢で、しかも丹に加害しようとした。太子丹は憂鬱かつ恐怖の毎日を送り、燕の国に帰りたいと秦王に願った。しかし秦王は丹の願いを却下した。「帰りたければ、烏の頭が白くなり、馬の頭に角が生えるようにすれば、帰してやる」と勝手なことを言った。丹が仕方なく天に向かって嘆いたところ、烏の頭が白くなり、馬の頭に角が生えた。秦王がやむをえず丹を帰したが、途中の橋で暗殺の装置を設置して丹を暗殺しようとしたが、装置が不発になったため、丹が難を逃して橋を渡った。夜中に関までたどりついたが、門がまだ閉まっていた。丹は鶏の鳴き声をしたら、鶏たちは皆鳴き出した。ようやく秦から脱出したという。すなわち亀の話はなかった。しかし似たような話は「毛寶白龜」という画題にも見える（「毛寶白龜」の条項をご参照）。おそらく後の人々は「毛寶白龜」の一部内容を取り入れ虚構しただろう。

【出典】

燕 太子丹質於秦，秦王遇之無禮，不得意，欲求歸。秦王不聽，謬言曰令烏白頭、馬生角，乃可許耳。丹仰天歎，烏即白頭，馬生角。秦王不得已而遣之，爲機發之橋，欲陷丹。丹過之，橋爲不發。夜到關，關門未開。丹爲雞鳴，衆雞皆鳴，遂得逃歸。深怨於秦，求欲復之。奉養勇士，無所不至。（無名氏撰『燕太子丹』卷上）

えんぴつりっしゅう 援筆立就「李賀」

唐の李賀（790～816）は七歳の頃、既に詩を書けた。韓愈と皇甫湜が李賀の家を訪ねた際、李賀に詩を書かせたが、李賀はその場で筆を取りすぐ完成した。

【出典】

李賀，字長吉，唐諸王孫。七歲，以長短之制名動京師。韓文公、皇甫湜過其父晉肅，見其子，總角荷衣而出，二公不之信，因而試一篇。賀承命欣然，操觚染翰，旁若無人，仍目曰高軒過、華裾織翠青如蔥，金環壓轡搖玲瓏。馬蹄隱耳聲聲隆，入門下馬氣如虹。云是東京才子文章巨公，二十八宿羅心胸。殿前作賦聲摩空，筆補造化天無功，元精炯炯貫當中。龐眉書客感秋蓬，誰知死草生華風！我今垂翅附冥鴻，他日不羞蛇作龍。二公大驚，以所乘馬車聯鑣而還所居，親為束髮。年未弱冠，丁內艱。他日，舉進士，或謗賀不避家諱，韓文公特著諱辨一篇，不幸未壯室而終。（宋・阮閱撰『詩話總龜』卷二）

李賀，字長吉，七歲能詞章，韓退之、皇甫湜造其家，使賀賦詩，援筆立就，名高軒過，有二十八宿羅心胸，筆補造化天無功等語，二人驚嘆而去。年二十七，唐憲宗召為協律郎。（『新鐫類解官樣日記故事大全』卷二，和刻本）

【作例】

「援筆立就」（法眼春卜一翁纂『丹青錦囊』卷三、寬延二年〔1760〕序、寶曆三年〔1753〕白雲館刻本）

えんぼきはん 遠浦帰帆

瀟湘八景の一つである。

↓「瀟湘八景」

えんま 閻魔

閻魔は梵文の Yamarāja の音訳であり、地獄を管理する王様である。

【出典】

梵音閻魔，義翻為平等王，此司典生死罪福之業，主守地獄八熱八寒以及眷屬諸小獄等，役使鬼卒於五趣之中，追攝罪人，捶拷治罰，決

斷善惡，更無休息。（慧琳撰『一切經音義』卷五）

【作例】

「閻魔」（林守篤編述『畫筌』卷四、正徳二年〔1713〕序、享保六年〔1721〕保壽堂・養心堂刻本）

えんまおう 閻魔王

↓「閻魔」

えんまじゅうおう 閻魔十王

地獄を管理する十人の閻魔のことである。

えんめい 淵明

↓「陶淵明」

【作例】

「淵明」（歙形蕙齋『人物略畫式』、文化一〇年〔1813〕春風堂刻本）

「淵明」（老蓮先生著『畫圖醉芙蓉』中卷、享和三年〔1803〕序、文化六年〔1809〕叙、青藜閣刻本）

えんめいこうどうにあんきよしきんしゅうつうくわのづ

淵明、後堂に安居し琴酒逸樂乃圖

晋の陶淵明の「歸去來辭」を凶解する挿絵である。全部で三枚あり、これは「其三」である。

【出典】

歸去來兮。請息交已絶遊。世與我而相違。復駕言今焉求。悅親戚之情話，樂琴書以消憂。農人告余已春及。將有事于西疇。或命巾車，或棹孤舟。既窈窕已尋壑，亦崎嶇而經丘。木欣欣已向榮，泉涓涓而始流。善萬物之得時，感吾生之行休。已矣乎。寓形宇內復幾時。曷

不委心任去留。胡爲乎，遑遑今欲何之。富貴非吾願，帝鄉不可期。懷良辰以孤往，或植杖而耘耔。登東皋已舒嘯，臨清流而賦詩。聊乘化以歸盡，樂夫天命復奚疑。（晉・陶淵明「歸去來辭」，唐・李瀚撰『古文眞寶』後集卷一）

【作例】

「淵明、後堂に安居し琴酒逸樂乃圖」〔其三〕（有臺藤應著、旭輝齋畫『畫本古文眞寶後集』初編卷一、嘉永三年〔1850〕玉山堂・學而堂刻本）

↓「陶淵明、彭澤に令たりし日、同僚と日々飲宴し世事に關らざる圖」〔其一〕、「淵明、彭澤令を連れて家に歸る、兒孫喜び迎る圖」〔其二〕

えんめいのきく 淵明菊

「淵明菊」は劉蒙の『劉氏菊譜』譜叙の内容に基づき描かれた絵である。

【出典】

余嘗觀屈原之爲文，香草龍鳳以比忠正，而菊與茵桂荃蕙蘭芷江離同爲所取。又松者，天下歲寒堅正之木也。而陶淵明乃以松名配菊，連語而稱之。夫屈原、陶淵明寔皆正人達士、堅操篤行之流，至於菊猶貴重之。如此，是菊雖以花爲名，固與浮冶易壞之物不可同年而語也。且菊有異於物者，凡花者以春盛，而實者以秋成。其根抵枝葉無物不然。而菊獨以秋花悅茂於風霜搖落之時，此其得時者異也。（宋・劉蒙撰『劉氏菊譜』譜敘）

【作例】

「淵明菊」〔橘有税「橘氏宗兵衛」繪『繪本通寶志』卷五下、享保一四年〔1729〕稱航堂板）

えんめいほうたくれいをのがれていえにかえるじそん

よろこびむかえるづ 淵明、彭澤令を連れて家に歸る、兒孫喜び迎える圖

晋の陶淵明の「歸去來辭」を図解する挿絵である。全部で三枚あり、これは「其二」である。

【出典】

乃瞻衡宇，載欣載奔。僮僕歡迎，稚子候門。三徑就荒，松菊猶存。攜幼入室，有酒盈樽。引壺觴以自酌，眄庭柯以怡顏。倚南牕以寄傲，審容膝之易安。園日涉以成趣，門雖設而常關。策扶老以流憩，時矯首而游觀。雲無心以出岫，鳥倦飛而知還。景翳翳以將入，撫孤松而盤桓。（陶淵明「歸去來辭」，唐・李瀚撰『古文眞寶』後集卷一）

【作例】

「淵明、彭澤令を連れて家に歸る、兒孫喜び迎る圖」〔其二〕（有臺藤應著、旭輝齋畫『畫本古文眞寶後集』初編卷一、嘉永三年〔1850〕玉山堂・學而堂刻本）

↓「陶淵明、彭澤に令たりし日、同僚と日々飲宴し世事に關らざる圖」〔其一〕、「淵明、後堂に安居し琴酒逸樂乃圖」〔其三〕